

東南アジア大陸諸国雑感

諏訪哲郎

昨年秋から始まった東ヨーロッパの社会主義諸国における共産党政権の相次ぐ崩壊は、日本人の誰もが予想しえない猛スピードであった。衛星放送で次々と送られてくる立ち遅れた経済状況や独裁的党幹部の贅沢な暮らしぶりを見ると、事態の急速な展開も当然のことと納得させられる。

この余波がアジアにどのような影響をもたらすかということ、アジアを主たるフィールドとしている者として大層気になることである。

1988年のラングーン（現ヤンゴン）でのビルマ国軍による武力弾圧、昨年6月の北京・天安門広場での人民解放軍による学生・市民への発砲と、アジアの社会主義諸国における民主化運動は、相次いで封じ込められた状態になっているが、今回の東ヨーロッパ情勢の大変革や、ソ連の民族自治共和国の分離独立の動きが、アジアの動向に影響しないはずはない。

それでは、具体的にどのような展開が予想されるかということになると、様々なシナリオのどれかが大いにありそうで、質問されても「うーん、一体どうなるのでしょうかねー」としか答えようがない。が、前提となる条件が相当違うので、東ヨーロッパの場合とはかなり趣の違った展開となることぐらいは予想できる。12億の人口を抱える中国が東ヨーロッパのようなスピーディな変化を遂げることは到底不可能であるし、東南アジア大陸諸国の場合、禁欲的な仏教徒が多いうえ、食料不足も今のところなさそうである。戦時下にあるカンボジアの市場でも、兵士が銃を水平に構えて見張っているヤンゴンの市場でも、品物はあふれんばかりに積まれ、活気に満ちあふれている。東ヨーロッパと同じような急速な展開が、1990年にアジアで起こるとは考え難い。

ここ数年、夏休みは中国を歩くのを常としていたが、昨年はヴェトナム、カンボジア、タイ、ミャンマーを大急ぎで駆け巡った。いずれの国も腰をすえてじっくりと観察したい国であるが、一週間しか滞在させてくれない国や、旅行社のガイ

ドが付き添うため、長居するとすぐに予算をオーバーしてしまう国があるのでやむをえない。大急ぎの旅のゆえに、観察も表面的なものになってしまうが、表面的な部分での各国の差異については、より明瞭に認識出来たかも知れない。

例えば各国の人々の顔立ちの違いや服装の違いなど、目で見てすぐに分かる特色などは、大急ぎで回るほうが多様性を強く感じることができる。

耳から入ってくる各国の言葉の雰囲気の違いも同様である。

ヴェトナム語は漢語の影響を強く受けており、南アジア語に属するカンボジア語は声調がなく、チベット・ビルマ諸語のビルマ語は日本語と同じ「目的語＋動詞」型で、音節末の閉鎖子音を脱落させており、というようなことを知識として知っていても、その言葉がどんな感じで話されているのかは、実際に聞いてみないと分からない。そして周辺の複数の言語との雰囲気と比較には、大急ぎの旅も悪くない。

フランスの植民地支配下にあったプノンペンのレストランと、イギリスの植民地支配下にあったヤンゴンの一流ホテルの食堂とで、パンや料理の味に天と地ほどの差があることも、大急ぎの旅でなければ、それほど強烈な印象として残ることもなかったかもしれない。（念のために・プノンペンが天である。さらに念のために・ミャンマーで今ひとつなのは洋食で、ビルマ料理は美味しい）

最後に、なぜか違いが見られる例を一つ。

東南アジアの都市では、自転車を改造した人力タクシーが庶民の足となることが多いが、ヴェトナムのシクロやカンボジアのリクシャーは、客席が自転車の前方についているのに、タイのサムローは客席が後方にあり、ミャンマーではサイドカー形式になっていてサイカーと呼ばれている。

どなたか東南アジア一帯の人力タクシーを論文のテーマの取り上げ、その全貌を明らかにしてもらえないものだろうか。